舞踏会

ユキアネサ

《登場人物》

ケイト Kate 17

妹アン Anne 14

兄エグバート Egbert

母フランセス Frances

農夫トーマス Thomas

芝生への散歩に誘ったのは妹のアンだった。ひだの豊かな赤いワンピースが風になびいている。端正な鼻、顎は情熱と決意に満ちていた。年の割には器量よしの妹に思えた。

この頃ランチティーの後に、散歩に出かけることが習慣になっていた。日が燦々と照りつけるのは、広くなだらかな丘陵地帯と、生き生きとした灌木(かんぼく)と雑草。黄色と白の小さい精霊のようなハルジオン。日を十分に受けて、パンパンに膨らんだ穂の重みで垂れているコバンソウ。少し遠くを見ると丘陵はいきなり下へ傾斜をはじめ、彼方にはいくつか小山が見えた。その山々にびっしり生えた樹木のこずえが、静かで澄んだ青い空にゆっくりと侵入し、天地の境界線をぼんやりさせていた。

「ふう」

ケイトは柵に寄りかかり息を整える。白地のペチコートを着て、長身なので、清涼な白い細木のようだ。冷静で寡黙な顎と青白い肌は、生来の冷淡な印象を際立たせた。日差しが照りつける中しゃべる時に、この姉の雰囲気はありがたかった。

たわいのない会話。今日の朝のことが話題に上がっていた。今日もいつも通りの朝だった。的確な指示で女中たちを動かす母フランセス、玄関で出勤の支度をしている兄エグバート、父マーシャルは奥の部屋で新聞を読んでいる。ケイトは兄の支度を手伝ってやった。仕事用の黒いなめし革の靴を用意し、ネクタイをピシッと結んでやった。そうして兄はいつものように、開いた玄関ドアを背景にしてケイトに微笑むのだ。彼は本当に笑っている、でも、それは彼自身の領域から出てこようとしない、無理解の、乾いた微笑みだ――

思わぬ来訪者に会話が止まる。足元でなにかが動いているのが見える。その闖入者(ちんにゅうしゃ)を見てアンが物珍しそうに叫んだ。

「**モグラだわ！**」

ピンク色の細い鼻をヒクヒクさせながら、地面に擦り付けて這っている。何度も頭の向きを変えては立ち止まり、生まれたばかりの赤子のように精一杯動いていた。

「えい！」

アンはいつの間にか持ってきた箒の根元をもって、柄の部分で思いっきりモグラの首のあたりを打った、バシっと。地を這う影はピタっと止まり、アンに持ち上げられた。

ケイトはさっきのモグラの活発さが懐かしくなった。陽を受けた、生の喜びの体現者のような黒くて赤い毛皮、前が見えないながらも必死にもがく健気な姿。ケイトはうっとりとその姿を思い描いていた。

アンは動かなくなったモグラを片手で持ちながら、最近知り合ったエドワード子爵との逢瀬を喜々として語っており、記憶を掘り起こし大切そうにかみしめては、微笑してこそばゆいように体をくねらせて、紅潮しつつ俯いたりした。ケイトが聞いていないことに気付くと、どうにかして注意を引こうと思った。丁度その時、良質な話題がやって来た。トーマスがこちらに気づいて手を振っている。

「最近、トーマスとは**どうなの**？」

家の中では滅多に聞いて来ないアンが尋ねたので、ケイトは受け止める準備が出来ていなかった。柵から腰を離し、うつむいている。胸が波立っていた。ケイトを一瞥してアンは話を続ける。

「**農夫**ってことを除いては、なかなか良い男だと――あ、いたっ！　こいつ**噛み付いた**！」

モグラは蘇ったように急に動き出し、必死の一噛みでアンの手から解放され、地面に落ちた。素早く穴を掘る脱走者に向かってアンがまた箒を振り始めた。

「えい、このっ！　やっぱりモグラは殺さなくちゃダメね」

しかしモグラは逃げおおせた。

「惜しかったわね」ケイトはほっと一息つきながら、慰めの言葉をかけた。

トーマスは恰幅の良い、赤ら顔をした男だった。日に焼けた赤黒い肉体が、服の下で胎動しているのをケイトは想像した。以前、遠くからトーマスを見たことがある。一生懸命に鍬で畝を作り、彼のなめらかな前髪はおでこにベタっとくっ付いていた。それ以降、彼の肉体が放つ熱線を受け取っては、悦に浸った。ああいう肉体は彼女の階級にはいないのだ。

彼が近づいてくる。モグラの記憶とトーマスの現前は彼女の頭を占領し、共に包囲して、単一の昂揚した生命感となっていた。

「お散歩はどうですかい？　お嬢さん方」

――まあまあよ、と、ケイトは何気ないふりをして答えた。

「そういえばね、モグラがいたのよ」会話の流れを止めないようにアンが気を利かした。

「ほう！　モグラかい」彼は眉をひそめて言った。「あいつら畑を荒らすからな。見つけたら殺す必要があるな」

「私、そうしようとしたのよ。でも逃げられちゃったの」

アンは指先で長髪をクルクルいじりながら言った。

「そうだ、そうだ。殺す必要がある。君はよくやった。さて、あんたは殺せるかい？」トーマスはケイトの方をちらりと見た。ケイトはその目から、何か試しているような、挑んでいるような思惑を感じ取った。

「必要があれば私だって……退治できるわ。何か道具を使って――」

「道具はダメだ。直に、手で、殺すんだ」ケイトが言い終わらない内にトーマスが息せき切って割り込んできた。

「それは必要なこと？」ケイトは驚きを上手く隠しつつ、彼をじっと、見つめながら言った。

「ああ、必要さね、どうしても」

「私にとって重要なこと？」

「**俺たち**にとって重要なことだ」がさつさと無教養の面影を感じさせる、彼の鈍く大きい青い瞳がケイトをじっと捉える。

「そう……なら考えておくわ」

「ねえ」とアンが帰り道で、道端の高い塀に沿って歩いている時に聞いた。「あなた達が何を話しているかよく分からなかったわ」

「そうかしら」とケイトは笑いながら答えた、よく見ると緑が浮かんでくる灰色の瞳に決意の様相を呈しながら。

＊＊＊

一週間後、ケイトの家で舞踏会が催された。シャンデリアが燦然と放つ光を、白い大理石の壁や、木製の意匠の凝らされた手すりが優しく受け止め、柔和な雰囲気を

漂わせた。ホールにはレースカバーの掛かった縦長のテーブルがあり、いくつかのゴブレットは頻繁に定位置から動かされた。目の前のプラムプディングは、その四分の一ほどが欠けており、大胆に、しかし上品にその中身を外に露出した。その奥には、よく味付けされた熱いアップルパイがあり、所々に赤褐色を帯びながら香気を漂わせている。遠くを見るとザッハトルテやルバーブ・クランブルが、みんなから待ち焦がれている船のようにテーブルの上を漂い、その載貨を着実に減らしていた。

それらと、手元のダンスカードを見比べながら、ケイトは退屈そうに、手持ち無沙汰に壁際のソファに座っていた。サテン生地の深い青のドレスを着て、栗色の髪は普段の力強いカールではなく、首元で束ねられ、白い花の髪飾りが添えられていた。ダンスカードが埋まっていく毎に、みんなの楽しそうな踊りは朝霧のように霞み、シャンデリアが鈍く光るように思えた。

アンは持ち前の活発さで、数多の踊りを完遂していた。時折、相手の伊達男がグイっと迫るように体を寄せると、得意げな様子で笑い声をあげ、こじんまりと目を伏せたり肩をくねらせてみせた。

一人の男が近づいて来るのが見える。肩幅が広く、威厳があるが、どこかぎこちない。服が体を押さえつけているように見えた。

「一緒に踊ってくれるかい、もし予定がなければ。ダンスカードは持ってないんだ」男はおでこの横を掻きながら言った。

その聞き覚えのある声でケイトは気づいた。トーマスだわ！　雰囲気があまりにも違うので気づかなかったのだ。

「どうやって来たの？」ケイトは、人に聞かれたくない秘密を伝えるように耳元で話した。

「君とはじめて会った裏の戸口からさ、」彼は安心し切ったように、胸を張りながら言った。「あんたの家は、俺が住んでいるところの領主だろ。だからこういう情報はすぐに知れるんだ。知ったとあらば、行動あるのみさ」彼特有の、あの他意も知性もないような笑顔を向けた。ケイトはその笑顔に吸い寄せられる自分を意識しながら、ひそかにエグバートの笑顔と比べていた。

二人はホールへと歩き出した、丁度真ん中の辺りまで。ケイトは彼の肩の後ろに手を回した、トーマスはケイトの腰を不安げに手で支えた。

そこからケイトは踊りをリードしなければならなかった。体の軸をグイっとずらし、彼に目配せしたり、急に距離を離し、繋がっている手を高く上げて自分を回させた。彼越しに見えるホールの景色は、無理やり引き延ばされたみたいに流れていき、ケイトは急上昇した気分になった。「私のために来てくれたの？」大気は清々しく、興奮に満ちていた。「ああ、それ以外に用はないさ」踊りが佳境に入る。「その服はどこで？」女はウンディーネのように、しなやかに、優雅に。男はグノームのようにずっしりと、力強く。「知り合いの仕立屋に借りを一つ作ったのさ」彼らは魔法にかかっていた。「嬉しいわ、もっと踊りましょうよ」シャンデリアは彼らを燦々と照らす。曲調は彼らの足を運ぶ。優しく、春の息吹のように。――どうして幸せはずっと続かないのかしら。幾星霜だって長過ぎることはないのに――　この一瞬に天地は輝き、全てが生まれる。

――踊りや知性の面では、とケイトは思った。私が彼を率先してもいい。でも体は――。手の平全体で彼の彫刻のような肉体を掘り当てる。そして生命が迸る力強い肉体の前に、自分が頭をもたれているのを想像してうっとりした。

曲は終わった、踊りも。けれど魔法は解けない。

「ねぇ……こんなことって……人生って――」近くを通りかかったアンに向かってケイトは口を開いたが、唇が形どった興奮は文章にならず、息切ればかりが事後の熱気に溶けていった。その声は、吐息混じりの響きでアンを蠱惑（こわく）と欲望の世界へ連れ行きながら、次第に色っぽさを含みはじめ、濃艶（のうえん）すらこもってきて、なんとかこのままでいさせてと懇願するようになっていた。

＊＊＊

それから三日が過ぎた。エドワード子爵が居間にやって来て、アンは相手をしていた。ケイトは化粧台の前の椅子に座り、茫然と自分を見ていた。魔法はまだ解けていない。女中のウィニーは小さい、腰の上をすっぽり覆うぐらいのテーブルを持ってフランセスの所に食事を届けるため廊下を歩いていた。奥の窓際の部屋にいるフランセスは、琥珀色のカーテンのついた、四柱式の大きなベッドに、上半身だけをなんとか持ち上げ、沈み込むように座っている。

「そういえば、」エドワードが口を開いた。驚きのニュースを持ってきたような自信で、そして彼以外に知っている者がいないことに対して満足げだった。「ここに来る途中で見かけたのですが、どうやら事故があったようです

よ」
「まあ、事故ですって！　どこで？　どうして？」アンが仰々しく言う。
「この近くにある草原を脇目に降りて行ったところの、一軒家がいくつか建っている場所ですね、丁度私はそこを通って来たので。でね、話によると一人の農夫が馬の下敷きになったらしいですよ」
　ケイトは鏡を見ていたが、もはや意識はそこになかった。
「まあ、それで、大丈夫なのかしら」とアン。
「さぁ、どうでしょう。私はたまたま耳にしただけなので。でも打ちどころが悪かったそうで、どうやら死んでしまったらしい」エドワードは役目を果たしたように満足げに言った。「もともと御者が道を歩いていたんですが、その彼の馬が蒸気自動車に驚いて跳ねあがってしまったらしく――ああ、これは誰かがそう言ってたんですが――それで馬は道から畑に転がり落ちて、そこで作業をしていた農夫が下敷きになったそうです」彼は上品に、しかし楽しそうに話した。
「その方の名前は何て言うの？」
「確か、トーマスと――」
「**トーマス！**」ケイトは肝をつぶしたように叫んで、エドワードをまじまじと見た。普段にまして蒼白になり、身体は細かく震えていた。「そんなことをここで言うなんて、悪趣味ですね！」ケイトはあえてエドワードを傷つけることで気持ちを整理しようとした。
「いやあ、私はただ、」エドワードはアンの方を見ながら、納得できない様子で眉を吊り上げている。「領民の状況を把握するのが、領家の務めと思いまして、伝えただけで――」
　ケイトはもう嫌とばかりに彼らから離れ、母親の方へ向かった。あんな楽しそうに話をするなんて信じられない。変に反応してみせたアンも同罪だわ！　ママなら分かってくれるかしら。勢いよくドアを開けたので、母親は驚いたようにこちらを見る。
「人が死んだんですって！」ケイトは息を荒げながら言う。
「まさかうちの誰かじゃないでしょうね？」とフランセス。
「いえ、違うの、でも――」
「もう、驚かさないでちょうだい！」と遮るように母が言う。
「そんなにいちいち構っていたら、心が持たないわ」ケイトが事件の様子を話し終えてもこう言うだけだった。
「でも、人が一人死んだのよ！」
「**たかが農夫**でしょう。ねぇ、ケイト。あなたちょっと変よ。少し休みなさい、ね？」
　この冷淡さ、無理解さ――兄の冷笑が脳裏によぎる。ここの人たちはいつもそうだ。領民のことを何か別の種族で、貴族には到底できない生活を好き好んでやっていると思っている。そして見てみぬふりをしている。アンとエドワードの交際は応援するくせに、私とトーマスのことは話題にすらしない。何が違うのよ、同じ――そう、私はちゃんと見たのよ！　彼が植物を愛し、汗水たらして働く姿を。そして仲間を見つけるとこう言って声をかけるのよ。「よう、相棒」って。相棒！　相棒ですって！　その時の言い方といったら、それは――、とっても――。
　目の前の母の態度を見ると、ケイトは怒りのあまり首の血管が浮き出た。
「私見舞いに**行って**くるから！」
「何を莫迦な、」フランセスもついに我慢できなくなり、冷たく言い放った。「許しませんよ。どうしてそんなに彼らに構うの？　彼らだって来て欲しいなんて思っていません。この話題はこれで終わりです。こんな話をして、せっかくのミッディ・ティーを台無しにするなんて――。まったく、なんて愚かなことを」
「行きますからね！」それでもケイトは強気を崩さずに言って部屋を出た。
　ケイトは決意に満ちていた。なんとしても彼らに会ってみせる、彼らに触れてみせる。居間の前を横切った時、まったく偶然にも目に飛び込んで来たのは、アン達が遊んでいる姿だった。それでケイトは少し不安になった。自分がこの空間から外れていて、間違っているのではないかと。この家における異物なのではないかと。先の自分の姿をもう一度頭の中で描いた。やっぱりママが正しいのかしら。そう思うと急に威勢がしぼんだ。
　玄関ドアが開く。誰かが帰ってきた。この時間なら兄に違いない。ケイトは急ぎ足でミアの厚いカーペットを過ぎ、階段を下りた。ほっそりした、長い、上品な手指で絹のドレスを握りしめている。そうして入り口のコートラックに脱いだばかりの外套を掛けている兄に向かって、自信喪失して、半ば泣きながら、すがるようにしてかけ寄った。綺麗な巻き毛はサッと広がると、ケイトの悲しみを包むように、やさしく背中を覆った。ずっと押さえつけていた悲しみが気づかぬ内に漏れ出していた。

「ねぇ……こんなことって……人生って――」
ケイトは口をつぐんだ。そこから先は言えなかった。言ったら、何かに敗北する気がしたから。兄は分かってくれるだろうか？
「ただいま、ケイト。そんなに酷かったのかい？　話してごらん」
エグバートは、全てを彼自身の中で理解できているというふうに言った。
そして例の乾いた笑顔を向けるだけだった――